

世界をみつめて1

嘘つきは会話上手

橋本 勝雄

ことばと世界について、いや、ことばの世界についてちょっと話をしようと思う。

大学3年生のときの、会話の先生だった。面立ちと名前からは日本人としか思えないのに、まったく日本語を理解するようには見えなかった。ほんとうにわからなかったのかもしれない。日本に暮らして数十年になっていたはずだが、近所のスーパーやパン屋で「外国語」でやり取りしていた様子をよく見かけて、ぼくらは噂したものだ。あの先生、はたして日本語ができるのかと。

もちろんここでいう外国語とは、ぼくら学生が学んでいたという意味にすぎず、それがどの国の、どんな言語かはこの際問題ではない。初級文法を習い、辞書を引き引き文章を追いかけて、短い表現をたどたどしく口に始めたころだといえれば充分だ。

「ウソを言いなさい」、それが先生の最初の一言であり、口癖だった。

知っての通り、たいていの会話練習は、その場の状況に一致しないという意味で、仮定の発話であり、ウソなのだ。

「私はお腹が空いています」とか「あなたは昨日、友達と映画を見に行きましたか」のような単文にしても、「『スペインの雨は主に平地に降る』とあの人が言ったとしても、彼がスペインに行ったことがあるなんて私たちは信じないだろう」といった複文にしても。

さらにいえば、空腹感が事実だとしても、発話者自身が文の意味を把握／実感できていなければ、たんなる空疎な音の連鎖にすぎない。

実際問題として、母国語で話していても、文脈から離れた文を発話するのは、つまりウソと知りながらしゃべるのは、けっこう難しい。おそらく先生はそれが言いたかったのだろうと、今になって思うのだが、そのころは何もわかっていなかった、少なくともぼく自身は。

ある意味で、完璧な会話の教師だった。語彙も乏しく、基本的動詞の活用さえおぼつかない学生たちに、けっして日本語を使うこと

なく延々と語り続けた。

それが思うより簡単な作業でないことは、外国語を少しでもかじった人なら、そして母語を教えた経験がある人なら、なおさら想像がつくだろう。話の通じないつらさと、意志疎通の欲求、他人から理解されたい願望は、きわめて強固で原始的なものだ。

「空腹は食べるにしたがって生じる」のだという。同じ様に、空虚なウソを繰り返すことによって、ぼくら学生は少しずつそのことばの実感を獲得した。つまり、先生のウソに少しずつ引き込まれていった。一年が過ぎたころにはかなり上達し、ある程度流暢な会話をこなせていたように思う。

「思う」というのは、結局、ぼくがそのことばを使ったのは、後にも先にも、先生の授業のなかだけだったからだ。留学もせず、他の教師や留学生との交流がなかったぼくは、先生の授業がなくなると、とたんに話せなくなってしまった。

おそらくことばの修得は、自分のウソを受け止めてくれる相手、それを信じて真実としてくれる受け手を最終的に内面化することで達成されるのだろう。残念ながら、ぼくの語学はその段階にまで至ることがなかった。

先生の特殊な「磁場」から離れると、自分のことばは空虚な、実体のない音のように感じられ、本を読んでもインターネットで音声も聞いても微妙に違和感がつきまとった。

先生と「外国語」でやりとりをしていたように見えたスーパーやパン屋の店員も、その「磁場」に引き込まれただけで、とくに勉強することもなく無意識に外国語でコミュニケーションをしてしまっていたのかもしれない。

ランドルフィの短編『無限大体系対話』は、詩人がある船乗りからベルシャ語を習って詩作をするが、実はそれはベルシャ語でもなんでもない、架空の言語だと判明するという物語だ。ぼくが話していたことばが先生の「個人言語」ではないと、だれがいえるだろうか。

はしもと かつお（准教授・イタリア文学）